Ⅴ　ユニット研究会
ユニット１（南アジア地域班）研究会

第1回　ユニット1（南アジア地域班）研究会

■報告題目：A Study on the Causes of the Reformation of Theravāda Buddhism in Bang ladesh（バングラデシュにおける上座部仏教復興の背景）
■開催場所：龍谷大学大宮学舎西黌2階大会議室
■開催日時：2011年4月26日（火）　16:45～18:15
■報告者　：ディリップ・クマル・バルア博士（バングラデシュ国立ダッカ大学人文学部パーリ学仏教学科長・教授）
■参加者　：14 人

【ファシリテーター】若原雄昭（龍谷大学理工学部教授）
【コメンテーター】　岡本健資（龍谷大学政策学部講師）

【報告のポイント】
現代に至るまでバングラデシュ仏教の変遷をパーラ朝以後の記録までさかのぼりその信仰形態や実践儀礼を概観する報告が，ディリップ・クマル・バルア博士よりなされた。

【報告の概要】
博士は，資料不足であるとしながらも，19世紀に行われた研究からパーラ朝以後のバングラデシュの仏教について情報を提示した。すなわち，パーラ朝以後，イスラム教勢力に圧されながらも，仏教徒たちはバングラデシュの沿岸部や，チッタゴン周辺に存在していたこと。そして，18世紀末にイギリスによって植民地化されるまで，バングラデシュの仏教は，土着の宗教儀礼やヒンドゥー教，イスラム教と融合していたことが指摘された。上座部仏教復興のきっかけのひとつは，19世紀初頭にイギリス人研究者が，バングラデシュには仏教は存在しないとする報告をまとめたことであった。バングラデシュの仏教徒は，イギリス人にアイデンティティを立証しなければならなかったのである。

また，上座部仏教復興のもうひとつの要因としては以下の事実が挙げられる。1826年にイギリス人がアラカン王国（現バングラデシュ・ビルマ国境付近）をイギリス植民地に併合したことが，ベンガル・アラカン・ビルマの領域内移動を容易にした。そのため，ビルマの上座部仏教がバングラデシュの仏教に影響を与えることとなった。また，併合されたアラカン王国の人々も上座部仏教を信仰していた。これにより，バングラデシュの仏教徒は，上座部仏教への興味を増し，アラカン地方の仏教指導者であったサラメーダ・マハーテーラをチッタゴン（現ビルマに隣接するバングラデシュの地方都市）に招聘した。サラメーダはチッタゴンで２年間，仏教からヒンドゥー教的要素を取り除く活動を行った。一方，バングラデシュの在家仏教徒は，比丘の上座部仏教復興運動に経済援助や教育機関の

設立などの支援をおこなった。さらに，仏教徒組織の役割が確立されたことで，仏教徒の結びつきが強められ，生活水準や教育水準が引き上げられることとなった。

以上のような政治的・社会的要因により，ビルマ・アラカン上座部仏教がバングラデシュ上座部仏教復興に影響を与えたことが報告された。現在のバングラデシュの仏教は，以上のような背景を持つが，現在，社会的に人気のある仏教儀式がヒンドゥー教やイスラム教に影響を受けている現実もあり，さらなる研究の必要性を指摘し報告を締めくくった。

【議論の概要】

岡本氏は，現代バングラデシュ上座部仏教の二大宗派であるサンガラージャ派とマハースタビラ派成立の経緯が明らかにされたことは有益であったと発言した。また，パーラ朝以降，仏教がさまざまな宗教の影響を受けて複雑化する時期（上座部仏教復興以前）に活躍した，仏教歌の歌い手（ガングリス）や，仏教祈祷者（ボージャス）が，比丘なのか在家なのか，と質問した。バルア氏は，上記ガングリスやボージャスが普段は家庭生活を行い，儀式をおこなう時にのみ比丘の衣服を着用すると回答した。さらに，祭式を行うために一時的に比丘になる伝統もあると説明を加えた。また，現在でも釈尊の生涯についての歌を魔除けとして歌う儀礼が行われている事例を紹介した。次に，岡本氏は，現在の仏教徒の信仰の実際と他の宗教信者とのかかわりについて尋ねた。バルア氏は，イスラム教徒との関わりを例にあげて，現在でも，仏教徒がイスラム教の聖者を供養する事例を紹介し，イスラム教徒は仏教徒がイスラム教の聖者を供養することを受け入れていると説明した。

【文責】龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第2回　ユニット1（南アジア地域班）研究会

■報告題目：　Dhāraṇīs, Domestic Rites and Folk Rituals: A Nāga Rain Rite in 6th century India
（陀羅尼・家庭祭・民俗儀礼：六世紀インドのナーガ祭）
■開催場所：龍谷大学大宮学舎　西黌2階　大会議室
■開催日時：2011年4月29日（金）　17:00～19:00
■報告者　：ロナルド・デイヴィッドソン（フェアフィールド大学宗教学教授）
■参加者　：19人

【ファシリテーター】桂紹隆（龍谷大学文学部教授）
【コメンテーター】　永ノ尾信悟（東京大学東洋文化研究所教授）

【報告のポイント】
六世紀頃のインドで密教がどのように形成されたのか，バラモン教の伝統や仏教，民間伝承などの混在を考えることによって検討がなされた。また，密教の研究方法についても一案が出された。

【報告の概要】
まず，デイヴィッドソン氏は，六世紀の陀羅尼文献と七世紀のインド密教の現れる過程に注目して研究を行っていることを述べ，併せて，現代の密教研究についての問題点を指摘した。すなわち，仏教密教を研究する場合に実践ではなくテキストを中心とした研究を行うこと，とりわけ注釈書を使用して古いテキストを理解する手法などは，六世紀の密教形成に関わった人々への理解を妨げるとした。このような現代の研究方法は，「人間の行為はテキストに基づいており，テキストはさらに古いテキストに基づいている」という先入観に依拠しており，問題があると述べた。そして，今後は，社会的背景を含めた密教文献研究を行う必要があるとした。

デイヴィッドソン氏は，これまで，仏教密教とバラモン教系のヒンドゥー密教のどちらが先か議論されてきた「起源問題」にも言及した。そして，新しい見解として，民間伝承，ヴェーダ時代の伝承，民間信仰に伝わる宗教的な行為の伝承が，陀羅尼文献，密教文献，全てに影響を与えた可能性を指摘した。

本報告では，六世紀の密教形成に関する問題から，密教にたいする研究方法がはらむ問題にいたるまで様々な提言がなされた。時代や地域によって様々な変遷をたどってきた仏教を研究する際には，テキストのみを価値ある資料とすることなく，社会的背景などを含めた広い視野が必要であることを確認する機会となった。

【議論の概要】
永ノ尾氏は，民間伝承やヴェーダ時代の伝承，民間信仰に伝わる宗教的な行為の伝承からどのように密教が形成されたのか，とテキスト各所を挙げ質問した。デイヴィッドソン

氏は，テキスト各所の検討は今後に譲るとしながらも，密教の形成を考える場合には，「ヒンドゥー密教が先か，仏教密教が先か」という二者択一的な考えに立つのではなく，当時のインドの民間伝承など複数の要因を考慮にいれる必要があると答えた。

【文責】龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第3回　ユニット1（南アジア地域班）研究会

■報告題目：第2回バングラデシュ調査報告
　　バングラデシュ国内に保存されるサンスクリット写本，他
■開催場所：龍谷大学大宮学舎清風館共同研究室302
■開催日時：2011年6月2日（木）　16:45～18:15
■報告者　：若原雄昭（龍谷大学理工学部教授）
■参加者　：15 人

【ファシリテーター】岡本健資（龍谷大学政策学部講師）
【コメンテーター】　桂紹隆（龍谷大学文学部教授）
　　スダン・シャキャ（種智院大学人文学部講師）

【報告のポイント】
前年夏に実施された第１回バングラデシュ調査に関する報告（2010年度第4回ユニット1（南アジア地域班）研究会，2010年12月7日）に続き，同年12月末実施の第２回調査について報告が行われた。特に，バングラデシュ国内各所（ダッカ大学図書館，バングラデシュ国立博物館，ヴァレーンドラ博物館）に保存されているサンスクリット写本について，バングラデシュ国外ではほとんど知られていない情報が開示された。

【報告の概要】
バングラデシュに残るサンスクリット写本のうち，バングラデシュ国立博物館に所蔵されているものは，整理もカタログ作成も行われておらず，実態が不明であると報告があった。ダッカ大学図書館，および，ヴァレーンドラ博物館に所蔵されているものは，カタログが順次発刊されており内容が概ね把握できるとのことであった。

ダッカ大学図書館所蔵写本は，各冊平均 2000 点を収めるカタログが既に 6 冊あることから，12000 点を超えることが推定され，カタログには仏教関係の写本は掲載されていないが，般若経などの仏教写本があることを口頭で確認したとのことであった。

ヴァレーンドラ博物館所蔵写本には，八千頌般若経など5点の仏典（同博カタログ No. 689, 851, 717, 852, 620）が含まれていることが報告され，撮影を許可された写本の実物写真が示された。No.689 八千頌般若経は，11-12世紀にサマタタ国（現バングラデシュ中部）を支配したヴァルマン王家第３代ハリバルマン王の第19年(1094 C.E.)という記年を持つ古い貝葉写本で，字体は初期ベンガル文字，191葉の完本，うち６葉に尊格の挿絵がある。No. 851 八千頌般若経は，同じく初期ベンガル文字で記された古い貝葉写本で531葉の完本，うち49葉に尊格の挿絵がある。第531葉のコロフォンにはネパール暦696年(1576 C.E.)の記年があり，そこにサダーシバマッラ王（1574-1580 在位）の名前が記されていることとも整合するが，これは明らかに後に追加された葉であり，本来の最終葉は失われたものと見られるから，写本自体の年代は更に検討を要するとした。No.717 悲華経は，ネパール暦775年(C. E. 1655)の記年を持つ紙写本であるが，現存する同経のどの写本よりも古く，誤写の少ない

完本であり，現時点では一定の資料的価値を有することが報告された。

No. 852 *Kārandavyūha* も初期ベンガル文字で記された古い貝葉写本であり，豊富な挿絵を含む点でも貴重な資料と思われるが，詳細な報告は省かれた。

No. 620 *Ekallavīracaṇḍamahāroṣaṇa-tantra* は 19 世紀の新しい紙写本で資料的価値に乏しいと判断され，撮影されなかった。

以上，バングラデシュに残存するサンスクリット写本の現状が説明された。バングラデシュにおいて，仏教の衰退後ヒンドゥー教とイスラム教が混在した時代を経て今日に至るまで写本が保存されていることは評価されるべきであるとし，南アジアに於ける仏教の多様な広がりの一端が確認された。

【議論の概要】

桂氏は，バングラデシュとインドのベンガル州はバングラデシュが独立するまで同じ文化・地域にあったことを指摘し，バングラデシュに現存する写本の収集はインドと協力したものではないのか，また，現行の八千頌般若経刊本には色々問題な箇所があるように思われるが，そうした意味でバングラデシュの八千頌般若経にはどの程度の資料的価値があるのか，と質問した。若原氏は，資料の来歴は不明なことが多く調べはつかない，またベンガルに残る八千頌般若経とネパールに残る八千頌般若経を更に体系的に調査する必要がある，と答えた。シャキャ氏は，No. 852に関してや挿絵の配置や描写方法，文字の形から，パーラ朝時代のものではないかと指摘した。

【文責】龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第4回　ユニット1（南アジア地域班）研究会

■報告題目：ヴェーダ文献における「輪廻と業」
■開催場所：龍谷大学　大宮学舎　西黌2階　大会議室
■開催日時：2011年7月21日（木）　17:00～19:00
■報告者　：後藤敏文（東北大学文学部教授）
■参加者　：42人
【コメンテーター】　桂　紹隆（龍谷大学文学部教授）

【報告のポイント】
「輪廻と業」の思想について，ヴェーダ文献に遡り，仏教との思想の連続性を確認した。

【報告の概要】
後藤氏は，印欧祖語から諸派へ言語が分かれていった経緯について，同時期に並列的に分かれた可能性に言及し，言語の分派を考える際には語源に遡って確認する作業が必要であることを指摘した。一方で，統計的に言語の近似度を測ることにより言語の派生過程を推定する研究には注意を要するとした。また，後藤氏は，言語に対して語源を追求し研究すべきであるのと同様に，宗教思想に対しても始源にさかのぼる研究が重要だとして，「輪廻と業」思想をヴェーダ文献から検討することの重要性を述べた。

後藤氏は，「輪廻と業」の思想の片鱗はヴェーダ時代に確認できるとして，リグヴェーダ X, 135「少年と戦車」の詩節を，来世の存在を示唆するものとして紹介した。さらに，「輪廻と業」の理論成立の道筋を，リグヴェーダの中でも新層（紀元前 1200 年頃）に属するといわれる X, 14, 8「葬送」の詩節（死者が天界へ行き再び家にもどるという内容）や，マイトラーヤニーサンヒターI, 8, 6（生前の布施や祭式の効力は死によって消滅しないという内容），ジャイミニーヤ・ブラーフマナ I, 18（天界から母胎へ戻るという内容）から確認した。次いで，バラモン・ヒンドゥー教，仏教，ジャイナ教を通じての「公理」として，死後の教説をブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド IV, 4 を引用して示した。

続いて，「輪廻と業」思想の仏教への展開を説明した。具体例として，ウパニシャッドで記されるアジャラ (unaging)，アマラ (undying)，アバヤ (not-fearing)，アムリタ (immortal) に至る方法を，仏教も提示していることが，苦諦（老・死・病・生）の記述を挙げて紹介された。この他，仏教文献中に残るバラモン・ヒンドゥー教の観念として，イティブッタカ 76:83 に記される「天人五衰」や，アビダルマコーシャ・バーシャ III, 79 に見いだされる「人間五十年」の記述も紹介された。

以上，ヴェーダ時代から仏教などへ「輪廻と業」の思想が受け継がれている様子が，文献資料をもとに示され，インド思想の多様性の深層をなす「連続性」が確認された。

【議論の概要】

フロアから，ヴェーダ時代の火葬について，火葬がもともと存在したと考えるのか，それとも火を使う祭式から火葬が始まったのか，という点について質問がなされた。後藤氏は，当時の人々は純粋に「死後に再生するためには火を使って天界へ送る必要があり，それによって地上へ再び戻ることができる」という考えを持っていたのだろうと回答した。

【文責】龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第5回　ユニット1（南アジア地域班）研究会

■報告題目：インド東部・オリッサ州の仏教徒コミュニティについて
　　―ヒンドゥーとの関わりを中心として―
■開催場所：龍谷大学大宮学舎清風館共同研究室302
■開催日時：2011年7月22日（金）　13:15～14:45
■報告者　：ダシュ・ショバ・ラニ博士（大谷大学文学部専任講師）
■参加者　：21 人

【ファシリテーター】若原雄昭（龍谷大学理工学部教授）
【コメンテーター】　中村尚司（龍谷大学名誉教授）
　　佐藤智水（龍谷大学文学部特任教授）

【報告のポイント】
2010 年度龍谷大学アジア仏教文化研究センター公募研究として実施された，インド東部オリッサ州での現地調査の報告がなされた。インドにおいて古くから「仏教徒」として認められてきたサラーカ・ジャーティに属する人々について，人口や歴史，村の現状，信仰の様相，近隣に住む他宗教徒との関わりなど多岐にわたる情報が開示された。

【報告の概要】
「サラーカ」とは「仏弟子」を意味する。ダシュ氏は，このカーストに属する人々を，インド東部に位置するオリッサ州バダンバ地域において，2010 年 12 月 18 日から 2011 年 1 月 9 日まで調査した。オリッサ州には，ナヴァヤーナの仏教徒（いわゆる新仏教徒），正式に改宗した個人仏教徒，古来より存在する仏教徒（サラーカ・タンティー，ランガニー・タンティー）がいるが，各仏教徒の人口は調査ごとに異なり正しい人数は不明である。特にサラーカ・コミュニティの歴史を語る資料は限られており，現地に残る歴史書『マーダラーパーンジ』に頼るほかないという現状が報告された。

まず，バダンバ地域のマーニアーバンダ村には 4000 人ほどの仏教徒が暮らしていること，そして，六つの寺院が存在することが報告された。村民は「大乗仏教徒」を名乗っているが，それらの寺院群の一つであるスニアーパータナー・サーヒ寺院には，オリヤー文字で刻まれたパーリ経典の一部が門柱の梁部分に確認された。また，儀礼においては『シシュヴェーダ』というサンスクリット，パーリ，ベンガル，オリヤー語の混在する経典が使用されることや，他に『ダンマパダ』や『トリラトナ・バンダナー』という経典も用いられることが報告された。さらに，宗教行事を行う「カルマニアー」と呼ばれる者が存在し，この者たちが報酬などを貰わずに結婚式，葬式や命日などを司ることが紹介された。

この村の仏教徒は五戒を遵守し，三帰依文を唱え，菜食主義の立場をとっている。また，オリッサにおけるカースト制度およびサブカースト制度に属さず，特別にサラーカというカーストに属す。職業に関して言えば，彼らは八正道の正命の教えに合致すると考えられ

ている染物や機織りの職に就いている。また，サラーカの生活にはヒンドゥーの影響もみられ，寺院に祭られた神々や供養の方法，結婚式や葬式の式次第が，ヒンドゥーのものと区別し難いことが紹介された。最後に，サラーカ・コミュニティの人々が，新仏教徒（ナヴァヤーナ）とは異なる考え方を持っていることが報告された。

以上のオリッサ州サラーカ・ジャーティの人々についての実地調査報告は，新仏教徒の研究に重点がおかれつつある現代インド仏教研究の中にあって，古い歴史を持つ仏教徒に対する研究の重要性を示唆するものである。サラーカ・ジャーティの人々がどのような歴史を辿り，現在のようにヒンドゥー教やイスラム教との共存を可能としてきたのか。当該村の現状は，仏教の多様性を研究する上で貴重な事例といえる。

【議論の概要】

佐藤氏からは，「サラーカ・ジャーティとその近隣のイスラム教徒やヒンドゥー教徒との間に争いはなかった」という証言が，どの宗教徒から得られたものか質問がなされた。ダシュ氏は，「これまでに宗教的な衝突がなかった」との証言は，仏教徒側とイスラム教徒・ヒンドゥー教徒側の双方から得られたものだ，と答えた。

中村氏は，日本の寺院にもヒンドゥーと共通する神格が祀られていることを例にあげ，マーニアーバンダ村の寺院にヒンドゥーの神々が祀られていることで仏教とヒンドゥー教が融合したと考えるべきでなく，多神教を受け入れる文化社会土壌を加味して研究を進めるべきだと指摘した。

桂氏は，文献学者が現地調査を行う場合の方法論を，文化人類学や民俗学，考古学などに学び確立していく必要があるとの提言を行った。

【文責】龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第6回　ユニット1（南アジア地域班）研究会

■報告題目：スリランカにおけるアナガーリカ•ダルマパーラの活動と後世のエンゲイジド•ブディズム
■開催場所：龍谷大学　大宮学舎　清風館3階　共同研究室1,2
■開催日時：2011年10月17日（月）　17:00～19:00
■報告者　：中村尚司（龍谷大学研究フェロー）
■参加者　：8人

【ファシリテーター】嵩満也（龍谷大学国際文化学部教授）

【報告のポイント】
アナガーリカ·ダルマパーラの活動を,時代的な背景,国外における仏教改革の志向,海外活動とその限界という３点から見直した。インド各地に設立されたマハーボーディソサエティの創始者でもあるダルマパーラは,スリランカ仏教の近代化に貢献した人物である。

【報告の概要】
時代的な背景として,1867年から1933年頃は,イギリス植民地支配の成熟期を迎えており,キリスト教の教育機関が発達していた。また,カースト制度を遵守する既成仏教の教団組織（ゴイガマ·カースト）への批判も高まっていた。この背景から,キリスト教への疑問も高まり,植民地ブルジョワジーの家系からも決別したいと希求したオルコット大佐による仏教改変運動が起こり,民衆は政治的な独立を意識し始めた。

ダルマパーラは, スリランカ国外（カルカッタ）において1891年にマハーボーディソサエティ（大菩提会）を設立し, 1893年のシカゴで開催された世界宗教会議では南方仏教を代表した。キリスト教, ヒンドゥー教, イスラム教に対抗して仏教を擁護する立場をとり, 来日のたびに日本仏教の各宗派との連携を模索した。

スリランカ国内の仏教改革運動（サルヴォーダヤ運動）では, 大きな貢献ができなかったダルマパーラであるが, 世界各地において仏教復興運動を推進した。インドでは, 仏教復興運動の中心的な担い手になり, 植民地政策を行うイギリスを厳しく批判した。しかし, 日本の植民地支配へは, 無関心であった。

以上，アナガーリカ·ダルマパーラの活動を彼の著作や来日した際の記事からたどった。スリランカで仏教復興を目指し, ヒンドゥー教の多いインドへも仏教を逆輸入しようとしたダルマパーラの活動の中で, 世界へ仏教を発信するという行動は, 今後の仏教を考える上で, 他宗教との異なる価値観を共有するひとつの手段として可能性をしめすものである。

【議論の概要】

嵩氏から,大谷光瑞は,アジアの各地で産業の指導·教育をおこなったが,ダンマパーラにもそのような側面があるのか,また,後にオルコットとの対立があったダルマパーラの仏教理解は,どのような理解であったのかと質問があった。中村氏は,ダルマパーラやその息子は,仏教の学校を 300 から 400 校ほど作って教育に熱心に取り組んでおり,現存する学校もあると答えた。また,ダルマパーラの仏教理解について,ダルマパーラ自身の著作を提示し,十二縁起や四念処を受け入れていること,パーリ教典を参考にしていたことを確認した。

佐藤氏より, ダルマパーラの目的はどこにあったのか, と質問があった。中村氏は, ダルマパーラの目的を, スリランカでブッダゴーサ時代の仏教を復興させて, ヒンドゥー教に席巻されているがブッダが実在したインドで仏教を復興させたいと考えていたとした。さらに, 荒れ果てたブッダガヤを手入れするという事業を行い, 日本の浄土真宗とも手を組んだと紹介した。

【文責】龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第7回　ユニット1（南アジア地域班）研究会

■報告題目：国際エンゲイジド•ブディズム•ネットワーク
　　—ブッダガヤ定期大会の報告—
■開催場所：龍谷大学　大宮学舎　清風館3階　共同研究室1,2
■開催日時：2011年11月29日（火）　17:00～19:00
■報告者　：ジョナサン•ワッツ（2011年度龍谷大学アジア仏教文化研究センター公募研究員，慶応大学非常勤講師，浄土宗総合研究所研究員）
■参加者　：10 人

【ファシリテーター】嵩満也（龍谷大学国際文化学部教授）
【コメンテーター】中村尚司（龍谷大学人間·科学·宗教総合研究センター研究フェロー）

【報告のポイント】
2011 年 10 月 26 日から 29 日にインド，ブッダガヤにおいて行われた国際エンゲイジド・ブディズム・ネットワーク（INEB）の定期大会の報告がなされた。各国のメンバーの活動（ワークショップ，講座プログラムなど）や問題意識（スリランカは紛争解決，インドは貧困対策など）の共有など，具体的な実例が開示された。

【報告の概要】
ワッツ氏は，エンゲイジド・ブディズムが INEB の背景にあるとし，そのエンゲイジド・ブディズムの定義を次のように紹介した。一つは，個人の解放だけでなく，社会的変革や正義の追求を通してすべての生命の開放を目指す仏教的実践，二つは，苦の原因に直接働きかけるための社会福祉と安心の実現と，また文化的，構造的な苦しみに対する社会変革を促す実践，三つは，全体的な変化の基盤として個人やコミュニティにおける共同的な仏教の実践である。

INEB は，平和•紛争解決，ジェンダー問題，進歩的教育，人権問題•社会正義，開発•国民総幸福量•仏教的経済，仏教組織と教団の変革と再生，青少年や精神的指導者の養成，仏法的な文化や芸術，諸宗教間協力に関心を持ち活動を行っている。

今年度の定期大会では，国際「若い菩薩者」青少年ワークショップが行われ，東アジア，タイ，マレー／インドネシアなどグループに分かれて「苦集滅道」を通して仏教的社会分析と解決法を学んだ。「苦」では，社会問題と経験を確認し，「集」では，苦の構造的原因と文化的原因を分析した。さらに，「滅」では，新しい dharma 社会を考え，「道」では，その構造と文化を変える活動を計画した。INEB 総合会議では，未来の法について，世代間の共有，未来の為のサンガという議題について討論し，紛争解決や終末期ケアなどについて学習を行った。

以上,今年度 INEB 定期総会について, 写真紹介や現地の様子を交えての報告がなされた。現代に生きる各国の仏教徒やその活動をみた。多様な仏教徒が互いに交流をもち活動している INEB 定期大会は, 多様な仏教徒が一同に介して互いを知るという点で貴重な事例といえる。

【議論の概要】

中村氏は，INEB の運動はささやかながら広がりが出てきたのでこのまま大きな動きとなるように願い活動を続けたいと述べ，今回の集会で理解できなかったこととして，インドのナグプールで活動するローカミトラ，マンゲーシ，マイトレーナーという人々は大きな仏教の運動をしているけれど，誰も出家せず，衣も着ずに人々を引きつけているがその理由はなにか，と質問した。

ワッツ氏は，イギリス人のサンガラーシタが彼らの師匠であり，サンガラーシタは出家し僧衣を羽織っていたが，社会活動を行う際に僧衣を着ていては受けいれられなかったため僧衣をぬぎ，彼らもそれを踏襲していると述べた。

【文責】龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第8回　ユニット1（南アジア地域班）研究会

■報告題目：ガーンディーとアンベードカル　—その対立と共通点—
■開催場所：龍谷大学　大宮学舎　西黌2階　大会議室
■開催日時：2011年12月8日（木）　13:15～14:45
■報告者　：長崎暢子（龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー，RINDASセンター長）
■参加者　：40人

【ファシリテーター】若原雄昭（龍谷大学理工学部教授•BARCユニット1リーダー）
【コメンテーター】　桂紹隆　（龍谷大学文学部教授・BARCセンター長）
岡本健資（龍谷大学政策学部講師）

【報告の概要】

長崎氏は，インド近代史を語る上では，近代史のはじまりをどこに置くかに注意すべきことを指摘した。そして，本研究会においては，それを1957年のインド大反乱からイギリスの植民地となった時点に位置づけることとし，両者の人生の比較を開始した。まず，共通点として，マハートマ・（M. K.）ガーンディー(1869-1948)がグジャラート州で商人カーストに生まれて後イギリスに渡り弁護士資格をとったのと同様に，B. R. アンベードカル（1891-1956）もマハーシュトラ州で不可触民カーストに生まれて後イギリスに渡り弁護士資格を取得したことが挙げられる。

彼らの共通点は，他にも存在する。例えば，両者ともに，機関誌の出版を英語で行うなど，インド内部のみならず世界の世論を意識して行動した点，あるいは，注意を喚起するために大衆を動員するための組織作りを行った点などが挙げられる。次に，相違点としては，ガーンディーが物質的欲望を追求する近代文明へ批判的な立場をとるのに対し，アンベードカルは近代文明のもつヒューマニズムへの共感と社会主義への期待をもっていた点を挙げることができよう。また，イギリスからの独立に関しても，ガーンディーが「ヒンド•スワラージ（インドの独立）」の旗印のもとに「独立」を最大の目標としていたのに対し，アンベードカルは独立によって変わるのは支配層にすぎず不可触民にとっては新しい奴隷制が現出するだけとし，カースト撤廃による差別の解消を最終目標としていた。

上述のように，異なる活動をしていた二人だが，それぞれ功績を残し現代インドにも影響を与え続けている。例えば，イギリスからの独立時，インド内部のグループ間争議をうまく抑えることで，目立った内戦を防止したことは，ガーンディーの大きな功績だと言われる。また，このことは非暴力的大衆運動という手法にもとづく結果であり，暴力を用いない紛争解決方法の有効性を世界に示したと言える。一方，アンベードカルは不可触民の地位向上をめざし，抑圧され分断されていた不可触民同士が大衆運動を組織することを可能にした功績がある。さらに，彼はインド独立後の政権において憲法制定委員会の長となり，インド憲法の制定と不可触民制廃止条項（17条）を規定する原動力となった。また，

一定の割合の元不可触民（いわゆる「指定カースト」）に一定割合の議席が留保される制度は，現代においても継承されている。

また両者は，差別的社会からの脱却を目指す点で一致しながらも，カースト制に対しては異なる見解を有していた。すなわち，ガーンディーは，差別を伴うカースト制が本来のヒンドゥイズムに基づくものではないと主張し，然るべきヒンドゥイズムへの回帰を目指した。アンベードカルは，カースト制を伴うヒンドゥイズムを差別の原因として排除しようとした。インドを，それぞれが考える理想社会に変えていくために活動した二人の人生は，時に交差しながらインドの独立という像を描き出していることが説明された。インドという多様な民族•文化•宗教を内包する国を一つにまとめた「独立」時に活躍した，考え方の異なるリーダーの比較を通して，現代インドへと続く思想の連続性を確認する機会となった。

【議論の概要】

桂氏より，ガーンディーの活動は断食や非暴力の行動が有名だが，ジャイナ教の影響を確認する必要があるのではないかとの指摘がなされた。また，ヒンドゥー教徒が行動するときに「非暴力」の考え方が古くからあったのか，と質問した。長崎氏は，ガーンディーはグジャラート州（現在でもジャイナ教徒が多い）で生まれ，母親の考え方にもジャイナ的なものがあったとし，影響は少なからずあるとしながらも，「非暴力」の考え方については，政治的に有効であると考え行動したのではなかろうか，と答えた。

岡本氏は，長崎氏が「ガーンディーとアンベードカルが，最終的には妥協を受け入れる点で共通する。」と発言したことについて，この「妥協を大切にする姿勢」は何によって培われたのか，と質問した。長崎氏は，ガーンディーについては，弁護士時代に担当した訴訟の解決時に残した「妥協の美しさ」という言葉に注目すべきであり，弁護士としての経験によって培われたものではないか，と答えた。

【文責】龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第9回　ユニット1（南アジア地域班）研究会

■報告題目：インド仏教の受難と衰亡
■開催場所：龍谷大学　大宮学舎　西黌2階　大会議室
■開催日時：2011年12月14日（水）　17:00～19:00
■報告者　：ジョバンニ･ヴェラルディ（ナポリ大学名誉教授）
■参加者　：38 人

【コメンテーター】　桂紹隆（龍谷大学文学部教授･BARC センター長）

【報告のポイント】
近年の考古学・碑文学・図像学からの知見，あるいは，文献を再吟味することにもとづき得られる知見によって，従来，インド史における定説とされてきたものが改められる可能性が示された。

【報告の概要】
報告者は，まず，インド史に対する研究の不充分さを指摘し，更なる研究の必要性を示した。具体的には，バラモン教諸資料が仏教についての多くの情報をも内包することを指摘し，ダルマシャーストラのような規範を示すような文献資料であれ，ラーマーヤナやマハーバーラタ，プラーナ群のような神話や伝説に類する文献資料であれ，それらに含まれるデータを精密に分析，理解し，利用することが大切だと述べた。

次に，インド史研究そのものの進展も，インド史とその連続性・不連続性を理解するためには不可欠であり，とりわけ，考古学・碑文研究・図像学が重要なものであるとした。なぜなら，それらの研究にもとづく成果は，文献資料群が提示し得ない歴史学的枠組を供給するためである。そこから，報告者は上述の研究方法を用いて，下記の5つのトピックを取り上げ，自身の歴史的研究の成果を示した。トピックは順に，「グプタ期」（仏教における有神論的な傾向の増大についての検討），次いで「思想に関する討論」（インドにおける政治・宗教に関する議論の伝統についての検討），さらに，「対立のレベル」（考古学・碑文学・図像学の資料に基づく仏教とその他の宗教との攻防についての検討），そして「金剛乗の反抗」（金剛乗が勢力を持つに至った背景についての検討），最後に「マガダにおける仏教弾圧」（仏教と仏教以外のインド諸宗教とイスラーム教の関係についての検討）という流れになっている。

とりわけ，最後のトピックである「マガダにおける仏教弾圧」では，仏教がインドから殆ど姿を消したとされる12，3世紀のインドの状況を，3つの段階に分け，仏教・ティールティカ（仏教以外のインド諸宗教徒）・イスラーム教という3つの勢力の動きに注目しながら，仏教の衰亡の過程を明らかにした。この内の第一の段階として，報告者は，バラモン教を奉ずるインドの諸王がイスラーム勢力（トゥルシュカ）と交戦していた間に，仏教が

ティールティカの勢力が弱まるように努め，イスラーム勢力と結んだことを指摘する。第二の段階として，イスラーム勢力を追い出すことをあきらめたインドの諸王が，イスラーム勢力と仏教徒との協力関係を割いたことを指摘した。そして，第三の段階として，デリー・スルタン朝期に，ティールティカがイスラーム勢力と妥協したこと，それによって，ティールティカはインドにその伝統を残すことが可能となったことを示した。その一方で，これより，インドにおける仏教の衰亡は，従来信じられてきたような，イスラーム教徒の破壊によるとは一概に言い得ないことについても指摘を行った。そして，最後に，報告者は，歴史学上の多くの重要課題が未解決のままであることを指摘して報告を締めくくった。

以上，本報告はインド史研究における従来の定説化した認識に再考を促すとともに，新たな研究手法の可能性を提示するものであった。

【議論の概要】

ヒンドゥー教と仏教に対する一般的な理解に少なからず誤りも見られることから，報告者の見解に賛同できる部分があるという意見が，桂氏を含めた多くの出席者からあがった。次いで，フロアからは，例えばヴェーダ，ウパニシャッドや苦行といった伝統，ナーガ崇拝など，仏教以外の宗教伝統と，初期からの仏教の伝統との関わりや影響関係についての質問があった。

報告者は，ブラフマニズムと仏教との影響関係については複雑な歴史があり，詳細な議論が必要であるとしながらも，もともと仏教の伝統は，ジャイナ教同様，インドの宗教伝統においては異端的で少数派のものであったと述べた。また，報告者は，ジャイナ教空衣派が8世紀以降に変貌しはじめたのと同様，仏教もインドの宗教の主流に近づこうとしたようだ，とする指摘を行った。さらに，金剛乗は，従来，大乗仏教から徐々に生まれてきたと考えられているが，それ以前の仏教伝統の蓄積を受け継がなかった大乗仏教に対抗するものとして起こった可能性がある，という指摘を行った。

【文責】龍谷大学アジア仏教文化研究センター